

## 神宮皇學館大學における山田孝雄についての一考察

A Study on the Standpoint of Yoshio Yamada in Jinguu-Kougakukan University

仲 井 文 之  
FUMIYUKI Nakai

山田孝雄は1940年、神宮皇學館大學の創設に際し初代学長となったが、この職も、1945年に国史編修院長として転出することで終えてしまった。大学はその翌年、GHQの神道指令により廃校となった。この5年余りは戦前戦中の時期で、山田学長が戦争責任を問われる前に転出したとか、大学存続のために最後まで先頭に立って尽力すべきであった等の噂や心ない非難があったという。山田孝雄の人柄からはかけ離れて見える行動の裏に何があったのかを確かめたいと考え、皇學館大学研究開発推進センターを訪問した。保管された資料や、同センター発行の『皇學館大學百三十年史』により、山田孝雄が皇学を究めようとする一研究者としての姿とともに、戦地に赴く教え子に送る教育者としての姿が明らかになった。そして批判が当たっていないことを確認することができた。

キーワード：神宮皇學館大學、国学、皇学、神道指令、GHQ

### 1. はじめに

『日本文法論』で名高い山田孝雄は、58歳で東北帝国大学を依願退官した。2年早く退官したのは、孝雄が小学校授業生の免許取得した年にある。当時の孝雄の実年齢は16歳で受験資格には若過ぎたため生年を2歳偽ったのである。その後中等学校の国語科教員免許を得た機会に戸籍上の訂正手続きを済ませたが、私立鳳鳴義塾に提出された履歴書には、訂正前の生年月日が記載されており、以後もこの生年月日に縛られることになったと推測される。<sup>1</sup>

その山田孝雄が7年後、戦前、戦中の神宮皇學館大學の初代学長として再び表舞台に姿を見せることになったのである。なぜこの時期に、しかも創設の大学の学長になったのか、この前身である「皇學館」と関係があるのではないか。また、大学の行く末を見ることもなく転出してしまったのはなぜか、本稿では、そういった前後の事情を含めて、山田孝雄が神宮皇學館学長として迎えられた経緯とともに転出の理由、学長としての職務や人となりを探っていく。

### 2. 神宮皇學館大學の創設

<sup>1</sup> 拙著『山田孝雄にとっての篠山に関する一考察』富山国際大学子ども育成学部研究紀要第9巻第2号、2018

神宮皇学館大学は、明治15年の「皇學館」設置を始めとする。内務省所管の専門学校（四年制）を経て、文部省所管の官立（国立）大学となったときに「神宮皇學館大学」の名称を用いた。終戦直後にはGHQの神道指令の発令を受けて廃校となる。昭和37年に「皇学館大学」（私立）が開学した。途中で中絶はあるものの現在まで130年を超える歴史がある。

まずは、その歴史を辿り、山田孝雄が学長として迎えられた経緯を追っていくことにする。

## 2-1 皇學館の設置と教育精神

皇學館は日本古来の神典や国文、国史を研究する機関として、1882年（明治15年）に伊勢神宮の神宮祭主、久爾宮朝彦親王より林崎文庫に神宮皇學館を設置する旨の令達が出され、これをもって創立とされる。設立の趣旨は、「専ラ神宮ニ関スル古伝ヲ明ニ」することを根本として、広く日本の伝統的文化の諸相の究明と、その素養をもつ人材の養成であった。<sup>1</sup>

1885年（明治18年）皇學館が開講し生徒募集を始める。生徒の資格は神宮神職出仕及び旧神職の子弟と限り、神宮出仕職員の保証を必要とした。

その後は次第に入学者の門戸を広げていっている。

1900年（明治33年）賀陽宮邦憲王より令旨を賜る。以後これを教育精神として現在まで受け継いでいる。

「令旨」

神宮皇學館教育ノ旨趣ハ 皇國ノ道義ヲ講ジ 皇國ノ文學ヲ修メ之ヲ實際ニ運用セシメ以テ倫常ヲ厚クシ文明ヲ補ハムトスルニ在リ夫レ業勤メザレハ精ナラズ事習ハザレバ達セズ況ンヤ本館期スル所ノ學ノ重且大ナルニ於テヲヤ  
本館學生深ク此ノ旨ヲ體シ常ニ師長ヲ敬重シ館則を遵守シ黽勉努力以テ他日ノ成業ヲ期シ夙夜肯テ怠ルコト勿レ（下線は筆者による）

## 2-2 官立専門学校へそして官立大学へ

以下、大学創設までに主たる出来事を、『皇學館大學百三十年史』（学校法人皇學館発行、2014）の記述を基に追ってみる。（但し、原文が縦書きで年月日の記述を漢数字としているところを、本稿では横書きの都合上算用数字に置き替えている。）

1895年（明治28年）6月1日 神宮皇學館を官立にされたいという上申書を、神宮宮司・館長鹿島則文より内務大臣野村靖宛に呈出する。〔類纂・総説43・資一298〕<sup>2</sup>

1903年（明治36年）8月29日 「神宮皇學館官制」が、勅令第103号を以て公布される。これにより、神宮皇學館は神宮司庁内に置かれる内務省所管の官立専門学校となる。<sup>3</sup>

12月10日 本科卒業生は、師範学校・中学校・高等女学校の歴史科及び国語・漢文科教員資格を無試験検定により与えられる。（文部省告示第216号）（官報6133・館雑7・一覧・総説67）

1904年（明治37年）官立専門学校として第1回入学式を行う。<sup>4</sup>

官立専門学校の認可を求めてから9年後にようやく神宮皇學館は内務省所管の4年制官立専門学校として新たな出発をすることができた。何より本科卒業生が、師範学校・中学校・高等

女学校の歴史科及び国語・漢文科教員資格を無試験検定により与えられることは注目に値する。

1919年（大正8年）2月15日 第41回帝国議会において、神宮皇學館を国立大学とすることの要望が衆議院議員白河次郎より提出される。

3月10日 慎重の考慮を要する旨答弁される。<sup>5</sup>

神宮皇學館が4年生大学しかも国立大学への要望が初めて出された。この辺の事情としては、要望が出される8日前の2月7日「帝国大学令」が改正され文科大学を学部とする勅令第12号が出されたことと関係すると思われる。「大学規定」ばかりでなく「高等学校規定」も見直され、再編成が図られる機運があった。しかし、この時期その要望がかなわなかった。<sup>6</sup>

1934年（昭和9年）神宮皇學館発展期成同盟会結成

1936年（昭和11年）5月23日 大学昇格に関し、関係者が東京会館に会して第3回協議会が開催される。神社側より、大学昇格は困難との意見<sup>7</sup>が伝えられる。

この年2月26日に二・二六事件が起きる。皇學館に於いて神道や皇学に関わる講義が行われている。

1937年（昭和12年）9月 大学昇格問題を、内務省の「神宮関係施設調査会」で「學館内容の充実を図り及び斯界の実情に処するための実施すべき改善案」等を協議する。〔総説155〕

12月14日 神宮皇學館を大学に昇格することの可否について、神社制度調査会第64回特別委員会にて論議される。〔神社制度調査会議事録〕<sup>8</sup>

（※この年の7月7日に日華事変が起きている。）

1938年（昭和13年）3月17日 第73回帝国議会衆議院議員建議委員会で、三重県選出代議士川崎克提出帝国議会の「伊勢聖地に神都大学設置に関する決議案」<sup>9</sup>が採択される。〔第73回帝国議会衆議院建議委員会義録〕

6月8日 大学昇格申請書を、神宮司長を経て内務大臣・文部大臣に提出する。〔総説156・資一819〕

8月6日 館友大会を開き、決議により期成同盟会を神宮皇學館内に移し、昇格委員を選出し、実現のための活動方針を検討し、実行に移す。〔館友3644・総説157・資一832〕

1939年（昭和14年）7月14日 文部省で予算請求に当たり、「神宮皇學館大学創設に関する経費概算」を立案、審議する。文部省としての意向（神宮皇學館を廃校として新たに神宮皇學館大学を設置する。教育方針はそのまま受け継ぎ、特色ある大学とする）が示される。請求予算は60万円、土地購入費28万円となる。〔総説157〕

8月24日・5日 大学昇格の件について、文部省議が決する。この頃、「神宮皇學館大學学科編成案」が成る。

12月2日 大学昇格の件についての関連予算が、大蔵省の承認を得

て、昭和15年4月の開校が決定した旨の通知が届く。〔館友380・総説157・資一876・891〕<sup>10</sup>

1940年（昭和15年）3月 神宮皇學館の大学昇格案が、帝国議会を通過する。大学昇格の決定により、神宮皇學館の本科・普通科の学生募集を停止する。〔一覽六十40・総説127〕

4月23日 「神宮皇學館大學管制」が公布され（勅令288号）、内務省所管の官立専門学校から文部省所管の官制単科大学となる。予科3年、学部3年とする。〔御署名原本・館友384・神研1-2・一覽・六十40・総説163・資二8・15・17・24〕

内務省所管の官立専門学校から文部省所管の官制単科大学になるまで、期成同盟会を結成し本格的な運動を始めた1938年（昭和13年）から約3年を要している。この期間は準備期間としては異例の短期間であり、それが実現したのは、時局（1938年「国家総動員法」公布、1939年第二次世界大戦が勃発）とも大いに関連があったことだろう。神道はじめ皇学を教える皇學館への注目、理解があったと思われる。

### 2-3 神宮皇學館大学初代学長として山田孝雄が就任

1940年（昭和15年）4月24日 神宮皇學館大學長（初代）に、山田孝雄（前東北帝国大学教授・文学博士）が任じられる。神宮皇學館長（11代）を兼任する。27日、赴任し、就任式を挙げる。〔館友384・一覽・六十41・資一896・資二12・18・21・30・502〕

4月30日 神宮皇學館大學開学式及び入学式を、祭主梨本宮守正王台臨のもとに挙げる。大学予科63名が入学する。なお全学学生入寮で、学部・予科は精華寮、専門部は清明寮に入る。

山田孝雄は晴れて神宮皇學館大學の初代学長となった。東北帝国大学を辞して既に7年の歳月が過ぎていた。この間の山田孝雄の仕事には2つの側面が見えてくる。一つは文部省との関りである。高等学校高等科教授要目改正委員（同）、教育審議会委員（1937年）、文部省視学委員（1938～1939年）等の委員に任じられて文部省との関りを深めている。もう一つは、日本学術振興会学術部第17小委員会委員（1934年）、教学新評議会委員（1935年）、日本諸学振興委員会常任委員（1936年）、教学局参与（1937年）、御講書始めの御儀に国書進講控（1938年）、神武天皇聖蹟調査委員会委員（同）、御講書始めの御儀に国書進講「古事記を奉る表」を講ず（1939年）等、国史、国学に通じた立場を活かし皇室との関りを深めている姿がある。<sup>11</sup>

このように1940年までの山田孝雄の業績から見て、神宮皇學館大學の初代学長は山田孝雄が適任であった。<sup>12</sup>

## 3. 神宮皇學館大学学長としての山田孝雄

### 3-1 学部開設と皇学への思い

山田孝雄学長は学部開設にあたり、神宮皇學館大学は「皇学」を究明する最高学府でなければならないとした。教官・学生には、学術の水準を高め、学会を指導する責任があるとし、き

びしい研学を求めたのである。

神宮皇学館大学が構想した皇学とは、山田孝雄が学長として関わった学部講座の構成から垣間みることができる。その構成は、4専攻（祭祀・政教・国史・古典）15講座（祭祀学・神道第一・同第二・国体学・法制史・法学第一・同第二・経済学・古典学・文学第一・同第二・道徳学・思想史）であった。（筆者により記述を一部変更）<sup>13</sup>

### 3-2 山田学長式辞

山田孝雄が学長として行った式辞は次のとおりである。（式辞より筆者が抜粋）

惟ウニ我國ノ教學萬邦無比ノ國體ヲ源トシ日本精神ヲ核心トスル所ニ存スルノデアリマス此ノ事タルヤ全ク神宮皇學館建學ノ旨趣ト一致スル所デアリマシテ本大學創設ノ根本精神ハ實ニコヽニ存スルモノデアリマス即ち本大學コソハ唯單ナル大學ト其ノ選ヲ異ニスベキモノデアリマシテ皇國ノ道を明カニスベキ特殊の大學トシテ眞ニ學行一如ノ理想ヲ實現シ我國教育ノ根本ヲ樹立シ以テ國家ノ期スル教學ノ眞ノ目的ヲ達成スベキ使命ヲ荷フモノトイフベキデアリマシス而モ其ノ教育的園境トシテ斯ノ地程恵マレタ所ハ他ニナイノデアリマシテ不肖孝雄乏シキヲ以テ學長ノ重任ヲ拜シ其ノ責任ノ重且ツ大ナルヲ顧ミテ恐懼惜ク能ハザス次第デアリマス

今ヤ我國ハ未曾有ノ事變ニ際會シ國ヲ挙ゲテ興亞ノ聖業達成ニ邁進致シテ居ルノデアリマシテ日本精神ノ發揚ハ益々其ノ必要ヲ加ヘルノデアリマス殊ニ紀元二千六百年ト申ス國家的記念ノ年ニ丁リ本大學ノ創設ヲ見マシタコトハ洵ニ意義深キコトデアリマス就キマシテハ 皇祖大御神威靈の下誓ツテ其ノ達成ニ全力ヲ致シ一ハ以テ本日ノ光榮ニ報イ奉リ一ハ以テ皇國ノ道ノ宣揚ニ寄與センコトヲ期スル覺悟デアリマス聊カ蕪辭ヲ叙ベテ式辭ト致シマス<sup>14</sup>

山田孝雄は、皇學館大學を単なる一大学でなく、皇国の教育根本をつくり教学の目的を達成する使命を担う特殊の大學として位置付けている。学長として過ごした期間は戦前・戦中にあったが、真摯に皇学を追及することが皇國の道に寄与すると信じていたと言える。

### 3-3 学生への思い その1 - 出陣の一学徒に贈った色紙 -

図1の色紙は、昭和18年春、学徒出陣の令達に応じた学生が入隊を決意し、時の学長山田孝雄を自宅に訪ね、最後の挨拶をした折に学長から「無駄死するな。神様がお守りくださるから、生きて帰れ。」との言葉と共にいただいたものだという。

書（ふみ）らおき ほこ（鉾）とりて立つ 若人を  
かみ（神）こそさぞと うなづきまさめ



図1 出陣学徒に贈った色紙

この色紙を複製した皇學館大學の解説には、「国難に殉ぜんと決死の覚悟を定め、学業半ばにして書物を武器に持ち替え、勇躍戦場に赴かんとする教え子達に対する心情が行間に溢れた名品と言わねばならない」と記されている。皇學館大学ではこれを平成18年に学生本人から寄

贈を受け、貴重資料として原寸の複製を作成して、広く関係者に頒布したものだという。<sup>15</sup>

このエピソードには、神宮皇學館大學の学生に求めるものが何であったのかを知る上での山田孝雄の信念がよく表れているし、「神様がお守りくださるから」の言葉には、国難に際しては必ず神の救いがある、という「神国日本」を心底から信じる当時の日本人の姿も浮かび上がってくる。

### 3-4 学生への思い その2 - 出陣学徒に対して行われた特別講義「令を講ずる総説」 -

神宮皇學館大學では、昭和18年12月の学徒出陣において、昭和18年11月20日に出陣生徒壮行式が催され、それに先立つ同月15日・16日の両日、山田孝雄学長より出陣学徒に対して行われた講義が「令を講ずることの総説」である。

この自筆原稿は富山市立図書館山田孝雄文庫に収められている。神宮皇學館大學史にとって貴重な資料として、皇學館大学研究開発推進センターが発行する紀要 第三号、平成29年3月1日発行に記載されている。それによれば、

令を講ずる総説は、八つの章からなる。

- 一、緒言
- 二、骨の代の有様とその骨の制の廃絶
- 三、官職の制の起りて定まるに至るまでの事情
- 四、令の由来
- 五、現存の令の事情
- 六、令の講究
- 七、令についての研究の要領
- 八、令の制のくづれ行くさま

山田孝雄が出陣学徒に向けての餞とした講義の内容は、あくまで学問的であった。令が取り入れられた経緯、それまでの制度と融合し時代の変化とともに改められていったこと等を研究することの意義を述べていくのである。「緒言」では、

令を講ずるは単にその令そのものの如何を知らむとするにとどまらず、如何にして令の生れしか、また令が如何なる精神を保てるか、又その令が古来の制度を如何に改めしか、又古来の制度を如何に保存せしか、更にその令が後に改められ、又は実行せられずなりしは如何なる事情と理由とによりしか等を見究めむことを企て、それと同時にそれらの由来と、それらの原因と結果とを觀て以て本邦の制度の根本義を知らむことを企つるにありとす。と述べている。<sup>16</sup> 一方、この講義を聞いた学生上杉千郷氏の日記には、

十月十五日 (中略) 吾々が戦場に向い行も学問とはどうして研究するものであるかを知って我々出陣に酒肴にでもしてくれとの事でした。(後略)

十月十六日 昨日に引き続いて学長の講義在り。今吾々征く者には直接関係なき如くに見えるが、此の学長の講義の底に流るゝものは真実なる学びを示されたものである。此れが皇学である。いたずらに時局便乗の講義でなく、学者の歩む道を説かれた学長の心境こそ実に尊いものがある。(後略)

と記されている。また、平成七年の戦歿学徒慰霊祭において西宮一民学長の奏上した祝詞には

(前略) 山田孝雄学長の曰く 汝達出で立ちなば 今ひとたび学問すること叶ふまじ されば最後の講義をせむとて 養老令神祇官条を講ぜられき。全学の教官・学生寂として 唯ペンを走らす音のみ聞ゆ。(後略) <sup>17</sup>

山田学長の講義の真意を出陣学徒そして教官は重くそして真摯に受け止めている。静寂の中ペンを走らす様子にそれが伝わってくる。

## 4. 終戦前後の神宮皇學館大學と山田孝雄の転出

### 4-1 被災する大学施設と玉音放送

1945年(昭和20年)5月14日 米軍の空襲により、精華寮の一部、武道場、祭式管理棟、新研究室等が焼失する。〔総説 194・206・529・548・591〕

6月9日 惟神道場・神宮文庫が艦載機の攻撃を受け、被災する。〔総説 206〕

7月28日 米軍の空襲により、宇治山田市の六割及び近隣町村が被災し、本学では精華寮の大半、清明寮、惟神道場等が焼失する。〔総説 194・206・資二 411・536・540・548〕

8月15日 学長以下教職員が講堂に集合し、玉音放送を拝承する。〔資二 549〕

昭和20年に入り、米軍の攻撃が激しさを増す。航続距離の短い艦載機によって攻撃を受けるということは、敵空母が日本近海まで来ているということ、日本には最早それを阻止する力が残されていないという事実を示している。そして、終戦の8月15日を迎えたのであった。

### 4-2 山田学長の転出とそれに対する批判

1945年(昭和20年)8月17日 山田孝雄学長が、国史編修院長へ転出する。学長事務取扱に教授小松泰馬が任じられる。〔総説 190・資二 415・416・502・549〕

山田孝雄の転出については、当初から批判もあったという。

当時、学内の噂では、「本学学長の職に永く留ると、戦犯として逮捕される虞があるという理由で、国史編修院院長として転出されたとのことであるが、戦犯に指名されたならば、日本国中どこへ遁れても必ず逮捕される。今こそ学長は最後までその職に留つて、大学の存廃について献身されるべきであつた。」と学長の豹変ぶりには批判の声も高かつた。(中略)

神宮皇學館大學は官立の神道系の大学であつたために、廃学の運命にあつたとはいえ、山田学長が陣頭に立ち、先ず軍政部と交渉し、その事情をふまえた上で、大学の存続を論議すべきであつたと思う。順序が逆であつた。

明治十五年創立に由来する神宮皇学館も、大学に昇格後、僅か六ヶ年程で、昭和二十一年三月三十一日勅令百三十五号を以て官制廃止、最悪の状態で廃学となつたのである。(『館友』第二〇七号、平成7年9月、下線は筆者による) <sup>18</sup>

神宮皇學館山田学長の転出を巡っては、「保身のための転出」であり、「豹変した」として、当初から批判の声があったのである。さらに、その後の昭和 21 年に大学が廃学に至ったこと（も大きな理由であったと思われる。大学を艦船とするなら、学長は船長である。艦船が沈むときは館長は船と共に沈むのが徳とされたのである。

それでは、山田孝雄が敗戦の際の今後の我が身を予想して学長職を投げ出したのであろうか。それにしては余りに手際が良すぎる。その辺りの事情を当の本人は次のように述べている。

（前略）小磯總督の内命を受けその親展書携へて山田に来て京城大學總長になつてくれという強硬な要求があつた。けれども自分はこの新たな大學が未だ完成せぬ中途に去ることは出来ぬといふ親展書を託してことわつたことがあつた。かやうに考へてゐた自分だから、この大學の第一回の卒業生を出すまでは見なければならぬと覚悟してゐたのだが思ひの外の轉任になつたのであつた。（中略）國史編修院長には自分は適任であるとは思はぬとたつて辭退したけれども當曲は山田を院長にするといふことを條件として内閣と交渉してきまつたことだから君がいやだといふ時はこの大事業は成立せぬといふことで無理往生に承知させられたのであるがそれは當分兼任といふことであつた。

（中略）かやうにして私は第一回卒業生の證書にその名を署することもできなくなつた。私は今日でも、その文部省の官僚の處置を不快に思つている。かやうにして強ひてこの大學と絶縁せしめられた私がどうしてこの大學の廢止に責任があることになるであらうか。（後略）<sup>19</sup>

山田孝雄の反論のポイントは、①大学の完成の途中では他へ移る気はなかつた ②第一回卒業生の證書に署名しなかつた ③國史編修院長と学長は兼任でやむなく引き受けた ④最初の約束と違って無理やり転任させられた ⑤廢学の責任は自分にはない ということになるであろう。

研究者として、そして学長として自らの信じる道を歩もうとしたことも、どういった事情があつたのかは明白ではないが、自分の思いとは全く別に「大学から絶縁せしめられた」という思いが眞の山田孝雄の思いであつたのである。

## 6. おわりに

これまで山田孝雄の生涯は、『山田孝雄の立志時代』<sup>20</sup>、『山田孝雄思い出の記』<sup>21</sup>、『山田孝雄年譜 附詠草』<sup>22</sup>、『晩年の父 回想の山田孝雄』<sup>23</sup>により知ることができる。中でも『晩年の父 回想の山田孝雄』には、皇學館大學学長時代の山田孝雄の家庭人としての様子が記されてはいるが、学長としての職務上の言動や心情等の記録がなかつた。そのため、憶測で言われた批判も随分とあつた。

今回、皇學館大學が発行した『皇學館大學百三十年史 年表編写真編』<sup>24</sup>と『同 資料編二』<sup>25</sup>に収められた資料は膨大で、皇學館百三十年の歴史の一ページに記される神宮皇學館大學の6年間は、学校日誌や機関誌、教職員の動向、教職員の感想などにより具に知ることができた。

山田孝雄が皇學館大學学長として過ごした約5年半に限って言えば、山田孝雄が学者として一本筋の通った仕事ぶりとともに、学生や職員に対しての思いやり溢れるエピソードを知って

その人柄と言動もこれまでの山田孝雄と全く変わらないことを知った。山田孝雄は、豹変などしなかったし、自らの節を曲げることもなかったのである

今後は、この間に出された著作物や論文、弟子の佐藤喜代治氏の著作等から思想・学術面での研究や、『晩年の父 回想の山田孝雄』と照らし合わせ、さらなる山田孝雄像を明らかにしたいと考える。

謝辞 これらの膨大な資料をまとめられた学校法人皇學館 皇學館史編纂委員会に敬意を表すとともに、資料を快く提供していただいた大平和典氏に深く感謝を申し上げます。

## 脚注

- 1 『皇學館大學百三十年史』資料編二 学校法人皇學館発行、2014年、3頁
- 2 同上 年表編 写真編 29頁
- 3 前掲 年表編 写真編 49頁
- 4 // 年表編 写真編 51頁
- 5 // 年表編 写真編 77頁
- 6 // 年表編 写真編 137-138頁
- 7 「大学は現在の政治機構にては文部省に属すべきものでありそれには文部省の方針、皇學館創立の主旨、経済上の問題其他種々の問題あり実現は到底困難なりとすべし」昭和11年5月の神社局見解
- 8 『皇學館大學百三十年史』年表編 写真編 142-143頁
- 9 「国家総動員ト云ヒ、又国民思想ノ指導精神ヲ單一化スル運動ヲ盛ンニ行ヒツ、アル時ニ、伊勢大廟ノ所在地ニ此種ノ大学ハナイト云フコトハ、非常ナ欠陥」提出者川崎克議員による趣旨弁明
- 10 前掲 年表編 写真編 153頁
- 11 『山田孝雄思い出の記』大田栄太郎著、財団法人富山市民文化事業団発行、1985年、136頁「山田孝雄年譜」
- 12 同上 56頁「皇學館大学創設前後」に、伊藤延吉が文部次官のとき、神宮皇學館出身の上野不慮務が招かれ、「学長に誰が良かろうか、と相談を受けた。上野は山田孝雄先生以外には考えられません、と答えたところ、伊藤次官も同意見であった。」との記述がある。
- 13 『皇學館大學百三十年史』資料編二 学校法人皇學館発行、2014年、5頁
- 14 同上 34頁
- 15 神宮皇學館大學初代学長 山田孝雄先生筆 和歌色紙 解説
- 16 皇學館大学研究開発推進センター紀要 第三号、平成29年3月1日発行、120頁
- 17 // 147頁、大平和典氏による補記
- 18 『皇學館大學百三十年史』資料編二 学校法人皇學館発行、2014年、550頁、(『館友』第二〇七号、平成7年9月)
- 19 同上 510頁、(『館友』第二一〇号、昭和27年3月)
- 20 『山田孝雄の立志時代』山田忠雄編
- 21 『山田孝雄思い出の記』大田栄太郎著、財団法人富山市民文化事業団発行 1985年
- 22 『山田孝雄年譜 附詠草』山田忠雄・山田英雄・山田俊雄共編、1959
- 23 『晩年の父 回想の山田孝雄』今野さなへ著
- 24 『皇學館大學百三十年史 年表編写真編』学校法人皇學館発行、2014年
- 25 『皇學館大學百三十年史』資料編二 学校法人皇學館発行、2014年